2014年 6月発行（年4回　3,6,9,12月発行）通巻 110号

子どもたちの明日

Children, Our Future

2014 年 6 月
110 号

目次

・CYK のピダン、プノンペンの染織展を彩る　1頁
・育てカンボジアの子ら　支援者たちの「みんなで布チョッキン」　2頁
・原子力災害３年目、浪江町のいま　3頁
・カンボジアから届いた優美な織り物 - その販路を拓いて　4頁

仏陀の前生を語る物語のひとつ、ヴァッサンタラ太子の逸話図。ペット・キム 2011 年、撮影 Siv Channa

1

CYK のピダン、プノンペンの染織展を彩る

カンボジアの絵絣ピダンは、濃淡に染め分けた絹の横絣糸が図柄を描く、物語性が豊かな絹織物です。長さ２メートル、幅約１メートル（研修センター規格）の精緻な織り布は、天蓋として仏像の頭上を覆ったり、婚礼や葬いの場の織物として大切にされてきました。絣模様が表すさまざまなモチーフは、釈迦の前世での逸話、現世と来世を結ぶ先住民信仰のシンボル - 船、海の生物、空飛ぶ鳥や竜、生命の木など、それぞれが生き生きと自然界をかたどります。古くから人びとの心の支えとしてあったピダンの高度な技術は、農村人口が９割を占めたカンボジアで、女性がその伝承の担い手となり農事のかたわら母から娘へと受け継がれていました。

目標は伝統技術の復活

1980 年、タイ国境の難民キャンプで始めた CYR 織物研修センターにも、伝統的なピダンを織る女性がいました。しかし 10 数年後、難民が帰還したカンボジアは、長い間の戦争や武力紛争で荒廃しており、ピダン絵絣の伝統技術はすっかり失われたかに見えました。当時、カンボジア復興支援の事業を始めようと発足した CYK (Caring for Young Khmer) は、キャンプ内での実績を生かして、1993 年に女性を対象に農村で織物の技術研修を始めました。以来、研修終了生は 170 名余り、巡回研修では 500 名以上の女性が技術を学びました。巡回研修は農閑期を利用する短期研修（２週間）でしたが、家内作業が生計の助けとなる点が喜ばれました。しかし、外国企業の縫製工場が激増したいま、手織布産地タケオ州でさえ、若い女性の大半が工場で働いています。

作品公開と織り手たち

それでも手間のかかるピダン研修を続けた女性たちは、最近開かれた二つの展覧会場で、見る人の心を奪うダイナミックな絵絣を何点も仕上げました。今年１月から４月までの「ピダン絹絵絣展」の会場は、プノンペンにある国立博物館です。この展覧会には、タケオ州の織物研修センターで織られたピダン８点が選ばれました。次は５月のインターコンチネンタルホテルでの催しで出展数は 12 点、いずれも博物館出品作とは別の作品です。

「国立博物館で自分が織ったピダンを見て感激しました。まさか私の作品が出品されるとは思いませんでした。」「私たちが手がけたピダンが国立博物館に展示され、すばらしいと思いました。」ピダンを仕上げた女性たちのことばです。作品公開に励まされて制作に励む生徒たちはいま、伝統復活と自活への道をしっかりと見つめています。

認定NPO法人
幼い難民を考える会
CARING FOR YOUNG REFUGEES

2 育てカンボジアの子ら
支援者たちの「みんなで布チョッキン」

身近にある布を人形やボールの形に裁断し、寄付金（現地で遊具仕上げの労賃や保育支援用）を添えて、CYK(プノンペン事務所) に送るのが「みんなで布チョッキン」の運動です。始まりから 10 年を経た運動は、いまカンボジア全土 25 州の子どもたちへの保育支援運動に発展しました。ここにご報告するのは、二つの国をしっかり繋いだ日本各地の企業内のグループや個人ボランティアによる、貴重なプレゼントの成果です。

運動のきっかけ

始まりは、「日本にいてもカンボジアの子どものためにできることはないか」の支援者の問いかけにありました。日本とプノンペンの両事務所で模索した答えは、タイの難民キャンプ保育所「希望の家」で、子どもたちに人気があった「布ボールや人形づくりの復活」でした。最初はカンボジアで買った布を使いましたが、布の色や柄に変化がなく、面白くありません。ところが日本から送られてきた家庭の余り布は、カラフルなボールに仕上がりました。プノンペンの汚れたスラムの家で見る布ボールには、ハッとするほどの輝きがありました。粗末な小屋の片隅で、ようやく縫い上げたボールに頬ずりするお母さん。その布ボールを大切そうに抱える子たちの、うれしそうな姿は忘れられません。大切なのは、人形やボールの縫い賃がその日暮しの家庭の収入になることでした。保育園の給食費を払えない家庭には、これが副業となる配慮もしました。この連携作業を支えてくださったボランティアの方々は 2005 年以来、全国で 13,251 名を数えます。日本から布が届くようになると、支援の規模はカンボジア全土に広がりました。僻地の子どもたちにも遊具が使えるようにと、教育省幼児局の保育者研修の実習に役立てたり、他の地域で活躍する NGO の手も借り配布網を広げています。

支援者の大きな力

手縫い製品には欠かせない正確な裁断を日本の支援者にお願いして以来、縫いぐるみの質は一段と良くなりました。また中に詰める綿や糸の費用、収入源のない人たちへの縫製賃、製品配布の費用や保育研修費用など、一連の経費の資金源は 500 円 /1000 円募金が頼りです。心強いことに昨年度の募金総額は 512 万円に達し、1900 個余りのボールと人形 1200 体余りが子どもたちに贈られました。縫いぐるみは 2 年ほどで傷むことや、政府が国際機関の援助で開設を予定する 300 の公立地域幼稚園（建物がなくてもできる 2 時間の簡易保育）での需要を考えると、これからも遊具・教材はまだまだ必要になります。今回行なった、個人支援者の意向を知るためのアンケートの回答を見ると「募金を添えて手持ち布を継続的に送っている」「ボールや人形の服の配色を考えるのが楽しく、子どもたちに喜ばれるとさらに嬉しい」などとする、運動の相乗効果を伝える声が聞こえてきます。また「子どもの発達や日常の暮しに遊具の果たす役割は大きい」「子どもを取り巻く厳しい状況の中、雇用を生み出すことの意義に共鳴」「子どもたちが将来なりたい職につけることを祈る」と子どもたちの生活環境や将来に心を寄せるコメントもありました。

次号では、全国各地の企業や団体で活躍する社会貢献グループの方々の声をお伝えする予定です。

ボール・人形を仲間に絵本の世界に遊ぶ子、大事なカバンは離さない。トロピエンクロライン村幼稚園、2013 年 11 月

ウッドミエンチェイ州（カンボジア最北西部、タイに隣接）の初回保育研修会。受講生 56 名に布ボールの縫い方を説明する教育省担当官。2013 年 9 月

子どもたちの喜ぶ姿を思い、仕上げを急ぐ受講生たち。CYK と教育省幼児局による合同保育研修会の光景。ウッドミエンチェイ州、2013 年 9 月

モンドルキリ州（カンボジア最東部、ベトナムに隣接）の研修は 2006 年の初回以来 9 年ぶりに復活し、州内 6 幼稚園で子どもたちを入れて実習した。2013 年 7 月

3
原子力災害 3 年目、浪江町のいま

福島県双葉郡浪江町への道は、やわらかな緑に囲まれ、きらきらと光を返す水田が、遅い雪国の田植えを待っていました。山村を縫う道はくねくねとどこまでも続きます。それと気づかなければ、この豊かな山々や森の先のいくつもの村と町が、大震災による原子炉事故の被害で苦しんでいるとは思えない穏やかな初夏の風景でした。

突然、車の行く手に「除染作業中」のピンクの幟が見えてきました。あたりには、異様に膨らんだ黒い袋が積まれています。近くでは見え隠れするクレーンの爪が、地表を掻き集めています。大地を占拠した汚染土の袋詰めはつぎつぎと車窓を過ぎ、過ぎては現れました。そろそろ検問所があるはずです。通行許可書と訪問目的地を確かめる検問所をいくつも通りました。しばらくすると隔離された空間のような中継基地へ誘導されました。ここは「帰還困難区域」の自宅へ向かう車が、立ち寄らねばならない基地です。建物を背に白い防護服を着た一群の作業員が、放射線量測定器具や防護衣一式を手に待っています。丁重ながら物々しい応対は、ある種の儀式を思わせました。理不尽な境遇におかれた人たちが、自宅へ向かうたびに耐えている絶望感と苛立ちが伝わってきます。

脱線したオモチャの貨車

この日、制限地区への一時立ち入りに誘ってくださった、浪江町立苅野幼稚園と大堀幼稚園の元職員の方は、苦しみに耐える力を「子どもたちにもらった」と話します。立ち寄った、苅野幼稚園では、休園中の園庭に咲く赤つつじの隣で、不似合いな線量計がこれも赤い数字で 3.238 mSv を刻んでいました。3 年前はなかったという野ばらが繁殖し、青い蕾が膨らんでいます。ひと気のない保育室をガラス越しに覗くと、喜々として遊んでいた子どもたちの姿が見えるような、「あの瞬間」が見渡せました。まるで突然の大揺れを記録したかのような、汽車遊びコーナーが窓越しに見えます。無心に遊んでいた子どもの慄きを見たような、転覆貨車のひとつが壁ぎわに跳んで横たわり、軌道の下をくぐるプラスチックの道に、転倒した車がいくつも重なっています。現実の世界の場面がそこに刻まれていたのです。帰り際に案内された浪江町の海側の畑地でも、災害の苛酷な現実がありました。国道沿いの広域な被害が、あの日のままなのです。

私たちにできることは

自宅の倒壊や流出を免れながら、放射線被害のために自宅に住めない人は、浪江町全体で 6 割にあたるとされます。家財を残したわが家への帰宅にも制限時間がある地域は、危険度に応じて「避難指示解除準備」「居住制限」「帰還困難」に区別され、町の中心部は無人化しています。東北電力からの電力が戻った日から、町内の交差点で赤・黄の信号の点滅が続いています。赤・黄の点滅は、宙づりにされた人びとの、先が見えない道のりを象徴しているかのようでした。被災 3 年後のいま、数知れない大人や子どもが家族離散や家庭の崩壊など、増え続ける問題に直面しています。誰もが不自由な仮設住宅や移転先で、答えのない難問を抱えながら、ひたすら耐え、強く生きようとしています。地震の国に暮らす私たちにできることは何か。被災地の子どもたちの明日を共に考え、連帯の絆の強化を思わずにはいられない訪問でした。

行き場のない汚染土の袋。指定区域で始まった国の除染作業。2014 年 5 月

国道沿いの道で津波被害を受けた家と流されてきた倒壊物。2014 年 5 月

いいぎり　ゆき
広報ボランティア・CYR 設立代表

4 カンボジアから届いた優美な織り物 - その販路を拓いて

表紙頁でお伝えしたように、カンボジアの織物の伝統復活は、研修に励んだ女性たちと支援者の努力のおかげで、ようやくその糸口が見えてきました。主だった展覧会は昨年 11 月、日本・カンボジア友好 60 周年記念の「ピダン絵絣展」（阪急うめだ本店、大阪）、今年 1 月から 4 月までの「甦るクメールの至宝、ピダン展」（カンボジア国立博物館、プノンペン）、それに続いては 5 月の、インタ - コンチネンタル ホテル（プノンペン）でのピダン展です。染織技術と美の昇華ピダンの数々は、ホテル会場の白壁に映えて圧巻でした。それを見て海外からのお客が何人も CYK の店ピダン・クメールを訪れました。展覧会に先駆けたカンボジア・デイリー紙の紹介記事は、絵絣織りの歴史と技術、作品や作者に触れ、途絶えかけた伝統が日本の団体とボランティアグループの力で復興した伝えていました。カンボジアだけでなく、日本でも織物製品を手にする機会が各地に増えています。製品販売に力を入れる支援者は、独自のイベントを通して、愛知、奈良、埼玉、東京各地で製品の紹介をしています。天然染料や複雑な技術を解説するビデオも、解りやすいと好評です。その一環として、東京では 7 月 14 日から 20 日まで、銀座煉瓦画廊で「ピダンと田部洵子創作アクセサリー展」（資料同封）が開かれます。

織物への評価と販路

このような活発な動きがあって、絹絵絣などが愛好家の目に触れる機会も増えるようになりました。最近の情報では、絹地のマスコット製品や藍染め布が喜ばれたり、ピダン絹絵絣を野点用の茶道具に生かすアイデアがあることもわかりました。カンボジアから届く織り物は、小規模な手織り製作ですが、製品の素材の良さや技術の質の高さが自慢です。しかし、急激な社会変動の最中、カンボジアには大量生産による安い機械製品が溢れています。手間のかかる絣織りの値打ちはあっても買う人が限られ、よく売れるまでにはなりません。結果として織り手は減るばかりです。カンボジアの人たちの手で一日も早く事業の自主運営を成り立たせ、織り手の自活を助けるためには、製品の売り上げを伸ばさなければなりません。

準備が整い、お客を待つばかりのゾナゾナ・クラブ奈良町バザー会場、2014 年 4 月

国内の販売網を広げよう

ありがたいことに、2007 年以来「カンボジア伝統織物の技術保全と女性の経済的自立」を支えようと、知り合いや友人を通して、善意の輪を広げる委託販売協力者の大きな力があります。スタディツアーを控えた学生グループや NGO メンバー、さらに企業の社会貢献グループが積極的に販売協力をしてくださいました。その結果、各地の支援者による 2013 年度の販売総額は約 132 万円に達しています。ご協力くださった方々に、紙面をもって深くお礼を申しあげます。さらに読者のみなさまには、織物製品へのご理解と事業へのお力添えをいただき、今後の支援活動に一層大きな成果をあげたいと願っています。

5 CYR イベント情報ほか

2014 年 7 月 14 日（月）～ 7 月 20 日（日）

・「ピダン」と田部洵子創作アクセサリー展

場所：銀座煉瓦画廊
東京都中央区銀座 4-13-18
医療ビル 2 階

開催時間：11 時 -19 時
最終日 17 時まで

TEL/FAX：03-3542-8626

・CYR 事務所移転のお知らせ

7 月上旬より下記住所へ事務所を移転いたします。

〒 110-0016
東京都台東区台東 1-12-11　青木ビル 2 階

E-mail: info@cyr.or.jp

詳細な場所については、同封の地図をご覧ください。
ご迷惑をお掛けすることがあるかと思いますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

認定NPO法人 幼い難民を考える会 CARING FOR YOUNG REFUGEES

子どもたちの明日 110 号
発行日：2014 年 6 月 11 日　発行人 : 深水 正勝

特定非営利活動法人幼い難民を考える会
〒 112-0013　東京都文京区音羽 1-10-4 池田ビル 3F
TEL：03-3943-6971　FAX：03-3943-6973
E-mail：info@cyr.or.jp　URL：http://www.cyr.or.jp

幼い難民を考える会（CYR）は認定 NPO 法人です。
ご寄付は税制優遇措置の対象となります。